

概 要 報 告

実施期日	7月31日(金)
部会名	中学校 社会部会

テーマ 『社会的な見方・考え方を養う、小中連携を意識した授業作り』

提案概要

小学校社会科の歴史的分野は、歴史の流れを重視する中学校と異なり、人物中心の学習形態になっている。本実践では、小学校で学習した人物が歴史の大きな流れの中でどのように位置づけられるのかを「支配」というキーワードをもとに考えさせた。本市では、日常的に小中連携を意識した取組がされており、本授業も小学校と中学校の両方で実際に行っている。この実践により、小学校の学習内容やその実態を知ることができ、中学校での学びについて改めて考える良い機会となった。小学校での学習内容を中学校で発展させていくためにも、小中連携のよりよいあり方を考えていく必要がある。

質疑概要

- Q 今回の授業で歴史を生徒にどう大観させることができたか考えるか。
- A 小学生にとっては、小学校で学習した人物が、歴史の流れの中でどう位置づけられるかが分かったと思う。中学生にとっては、歴史を大きく見ることにより、後に單元ごとの学習において、その時代がどのような位置づけなのかを理解させやすくなると考えている。
- Q 今回の授業で、支配力のピークを奈良時代としたのはなぜか。
- A 今回の授業のテーマは歴史を大観させることだったので、あえて生徒がイメージしやすい図にした。
- Q 大観をさせるために単純な図にしたということだが、実際はもっと複雑であると思う。生徒に多角的、多面的な見方を身につけさせていくために、このあとの授業をどのように展開していくのか。
- A 今回の授業は大観させるための一つの見方であり、今後も同じテーマでやっていくわけではない。
- Q 生徒の中から他の見方が出てきたときにどう扱うのか。違った見方が出てきたときに、より大観ができるのではないかと思う。
- A 一方的な見方を押し付けるのではなく、疑問や矛盾点が出てきたときには「そういう見方もあるのだね」と拾っていけるようにしていきたい。

研究協議概要

全体を6つのグループに分けて、「①小中連携の実践例（小中連携を行うにあたっての課題）」、「②歴史を大観させるために、どのような発問が生徒にとって有効であるか（具体的な実践例）」についてグループ協議と発表を行った。

<①について>

- 中学校の教師が小学校に行き、出前授業という形で授業実践を行っている。
- 小学校と連携して授業参観や話し合いの場を設けているが、学校規模によって合わせやすさに差があり、日程をいかに調整していくかが課題である。
- 小学校で田植え体験などをしていると、中学校の授業でもイメージがしやすくなるので、互いにどのような授業をしているのかを知ることが大切である。
- 小学校は教科の専門ではないので、教科研究で話し合った内容が、他のクラスの先生方に伝わっていきにくいことが課題である。そのため、小学校ではクラスによって習熟度に差ができてしまい、中学校ではゼロからスタートしなければならない現状がある。
- 小中で教科書の内容を見合うことが必要である。中学校の教師は小学校での授業内容を把握し、社会科としての力を身につけさせていくことが求められる。
- 授業内容だけでなく、授業の受け方（話す・聴くスキル）などについての連携も重要である。
- 小学生はよく発言をするが、中学に入るとなかなか発言しにくい雰囲気が出てくるので、小学校での話し合い活動や

表現力の伸ばし方について学んでいくことが求められる。

<②について>

- 農民、天皇、貴族など1つの「立場」から歴史を見ていく方法がある。
- 食べ物、暮らし、文化などの変化について調べさせ、その変化の意味について考えさせる。
- 単元ごとに振り返りを行い、学習した内容について自分の言葉でまとめさせる。
- 「なぜ江戸幕府は260年続いたのか」「縄文時代と弥生時代ではどちらが幸福か」などの発問。
- 各時代にネーミングをつけて理由を説明させる。
- 時代を色で表現させ、その理由を説明させる。
- 学習指導要領では「時代を大観させる」とあるので、歴史全体ではなく、各時代のイメージをさせていけると良い。

まとめ概要

協議をしていく中で、小中連携の重要性と課題が見えてきた。小学校での学習内容、子どもたちの反応などは、中学校では分からない。しかし、生徒の学びをより深めていくためには、小学校での学びを中学校で意識的につなげていく必要がある。そのためには、小学校の教科書を見ることや、実際に授業参観を行い、小中の先生たちで意見交換をしていくことが大切である。日程の調整が困難であることや、専門教科である中学校と全ての教科を教える小学校の違いなどの課題はあるものの、まずは小中それぞれで行われている実践について知ることが最も重要なことである。それぞれのことをよく知った上で、生徒に思考をさせる問いを発達段階に応じて考えていくことが求められる。

平成25年6月に教育振興計画が閣議決定されたが、その中に小学校から中学校への円滑な接続を目指し、小中一貫教育の取組を促進するとある。その背景としてデータが示されているが、いわゆる中1ギャップの根拠となっている。そのデータ中に、授業の理解度調査がある。「授業の内容がわかりますか?」「わかります。」と答えた生徒の割合が、国語・数学・理科・社会の中で一番減っているのが、社会科。小6で45.5%の児童がよくわかるとしていたのが、中1で30.5%と、なんと15ポイントもマイナスになっている。また、教科の好き嫌いでも、小6から中1で「好き」の割合が一番下がったのは、社会科。なぜ、こんなに下がってしまっているのか、小中連携と関連して考える必要がある。

学習指導要領には、「小学校社会科では、基礎的な知識や技能のみならず、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いている。したがって、単に学習内容だけでなく学習方法にも着目し、また、生徒の興味・関心や能力、態度にも配慮して、中学校社会科の各分野の学習が効果的に行われるようにしなければならない。」とある。このように、小学校と中学校ともに、それぞれの学習方法の違いについて、互いに確認をしていき、生徒のギャップを埋めていく必要がある。